

先生の行間

平凡社編集部 竹内涼子

私が最初に先生にお目にかかったのは一九九八年の暮れのこと。先生の著作集刊行開始にあたり、かつて小社で『字通』を編集し、退社後も引き続き著作集を担当する先輩編集者に付いて私も一緒に仕事をさせていただくこととなり、桂のお宅を訪ねたのでした。

あの『字統』『字訓』『字通』を一人で書かれた、ご高齢の先生にお会いするということで、緊張がちがちなながらも訪問でしたが、いざお会いしてみると——「こんな人、会ったことない！」——優しくユーモアに溢れ、かつパワフルなお話しぶりにいっぺんに魅了され、最初の緊張はどこへやら、なぜか元気づけられ、うれしい気分で帰途についたのを覚えています。

あれから九年。思い返してみると、先生との仕事はその後も驚きの連続でした。

まず、この間、先生にしかられたことは一度もありませんでした。他の著者なら怒られて当然というような失態も多々あったのですが、先生は怒るどころか、孫のような世代の私に対してもいつも丁寧に接してくださいださり、編集の便から経費のこと、印刷所の手間といった細かいことまで、さりげなく気遣ってくださいました。原稿も、いつも目次からあとがきまで整った形でお送りくださり、その後の著者校正も、締め切りを過ぎてこちらから催促をしたことはほとんどありません。「こんな著者もいるんだ」——いくら催促してもなしのつぶて、という著者に少なからず悩まされていた私には、こうしたことも、新鮮な驚きでした。

そんな先生の著作の数は膨大で、小社から出させていたただいたものだけでも六十タイトル以上、その大半が大部かつ高価で

あるにもかかわらず、版を重ねています。このことから、先生の学問が多くの人に受け入れられていることがわかりますが、さらに編集部に寄せられる、下は小学生から上は八十、九十歳までの幅広い読者からの手紙には、先生の著作から受けた感動や、それぞれの生活の場で生じた疑問などが綴られ、それらを拝見すると、たんに「愛読している」という以上に、先生の著作を読者の方が思い思いのやり方で人生の糧とされているということが強く伝わってきます。どれをとっても決して易しいとはいえない先生の著作がこのように読まれているということ、それも一つの驚きです。

しかし、私になにより驚き、いまだに衝撃を受け続けていること、それはやはり先生の原稿の一行、一行、先生の著作の一文、一文にほかなりません。甲骨文・金文をはじめ、あらゆる資料の緻密な読解によって私たちの目前に再現された中国の古代世界。さらにその世界が、漢字を通じて現在に生き続けているという事実——先生の力強く詩的な文章で描き出された豊穡なる世界は、私にとってまさに驚異の世界です。

と同時に、そうした先生の文章にふればふれるほど、その行間に見えてきたもう一つの驚異の世界があります。それはある程度推測はしていたものの、実際に先生の「字書」の仕事に関わることによって、推測をはるかに超えた物理的事象として、私の目の前に現れたものでした。

先生が亡くなる前年の十月、『漢字の体系』（仮）と題された原稿が送られてきました。その内容は、許慎の『説文解字』と先生の字説を対比し、先生ご自身の言葉を借りると、「全体を二部に分ち、第一部は百科辞書的に事項による分類法で当時の知識の整理の仕方を問題とし、第二部は「元₁完₁冠₁寇₁頑₁」のように、もと字（元）とその系列字（完₁冠₁寇₁頑₁）を挙げ、それらの字の系列的な解説をする」という、これまでの五十音順の字書とは異なる新たな形の著作です。最初にいただいた部分は、その夏に体調を崩して入院された際、病室に机を持ち込んで書かれたというものでした。さっそく原稿を拝見し、形式的なことについて若干のご提案をしたところ、その後も体調がすぐれないなか、全面的に訂正を加えてくださいました。そうして改めて送られた原稿を見てびっくり。全体の分量は、先生用の二百五十字詰め原稿用紙で約千七百枚、項目数は約二千三百もありました。しかもその項目すべての形式が改められ、読みやすいようにとのお心遣いからでしょう、訂正を入れた箇

所一つ一つには、ペンや修正液で消す代わりに、文字や行の幅に合わせて切られた大きささまざまな紙片が無数に貼られていたのです。その後お宅へうかがった際、先生は「あの原稿はすごかったやろ。あれ貼ってるのを見てな、娘が「じょうず、じょうず」言うてからかうんや」と笑いながらおっしゃっていましたが、その執筆と細かい訂正作業は、入院されるほど体調のすぐれない状態でなされたとは、とても信じられないものでした。

私はこのような、すべて書き下ろしの大部な先生の字書を担当させていただくのは今回が初めてです。印刷所に入れようと、いざ原稿整理をはじめましたが、一枚読むにも大変な時間がかかるうえに、やってもやってもなかなか進みません。しかも印刷所の人にわかるようさまざまな指定を入れるためボールペンの減りが異常に早く、数日作業が続くと、手がこわばるような気までしてきます。こんなふうになるのは私だけかと思ひ、先生の別の著作の編集をしている先輩編集者たちに聞くと、やはり「ペンがすぐなくなる」とか「腱鞘炎になる」という答えが返ってきました。こんなことは普通の本では考えられません。『漢字の体系』でこの状態なら、これをはるかに超える『字通』が作られたときは、一体どんなことになっていたのか――。

『字通』は項目数約一万、熟語にいたっては約二十万語が収録された巨大な字書です。一頁あたり四千字、全体の頁数は二千三百で、総字数はざっと計算しても九百万字以上。しかもその九百万字には、「文字の生い立ちとその叡智」、それを裏付けるように引用される膨大な中国古典からの用例がぎっしり詰まっています。この用例だけ見ても、その陰でなされた作業は想像を絶するものがありますが、その大変な作業については、お嬢様の津崎史さんが、『文藝春秋』(二〇〇七年四月号)に寄せた追悼文でふれられています。

史さんには、現在も先生のお仕事のさまざまなことを相談させていただき、お連れ合いの津崎幸博さんには、『字通』の新訂版や『漢字の体系』の校正で大変お世話になっていますが、お二人は先生がお亡くなりになる前からいろいろな形で先生のお仕事を手伝わっていました。あの阪神大震災が起こったときも、『字通』の校正の真っ最中で、ご自宅が被害に遭われ、お二人も避難生活を余儀なくされるなか、大量の『字通』のゲラを京都へ移して校正を続けてくださったことを後になつてうかがいました。一口に「手伝う」と言っても、九百万字のゲラ、しかも字書という間違いの許されないものの校正には、どれほどの

時間と労力がいったことでしょう。

そうした陰の支えがあったからこそ、あの『字通』を刊行することができたのだと思いますが、それにしても八十歳を超えた先生が、お一人で九百万字を書き上げられたというのは、とても人間業とは思えません。その過程で必要であったであろう集中力、忍耐力、体力を考えると、あまりに常軌を逸していて、どうしても「先生はおかしい」と思わざるをえません。

先生はあるとき、「字書はわがままなほうがいい」とおっしゃいました。その一方で「字書は腹を立てたらあかん」ともおっしゃいました。何気ない調子でからつと発せられた言葉でしたが、大部な字書を一人で書き上げるといって、孤独で気が遠くなるような仕事の本質が凝縮されているようで、このふた言がとても重く感じられたことを覚えています。

先生は、お体の具合がかなり悪くても、人前ではそれをお見せになりませんでした。二〇〇五年に入院されたときのお手紙でも「ホテルのようだ」とか「こんな眺めのよい所で仕事をするのは初めて」「一寸避暑の気分」などと、私たちに極力心配をかけないように気を遣ってくださいでしたが、晩年はやはりおつらかったのでしょうか、さすがにお手紙の文面にもお体の不調がうかがえるようになりました。そのような状態にもかかわらず、お仕事に対する姿勢は依然として変わらず、亡くなる半半年ほど前の二〇〇六年四月十三日付のお手紙には次のようにあります。

殷文札記の校正と索引取りを送ります。(略) 東アジアの古代王権成立の事情を是非書いておきたくて、これは史学の上でも非常に重要な問題であると思っています。ただ歴史学者は仲々取上げてくれずもつと東アジア的古代という問題意識をもつてほしいと思っています。(略)

漢字の構造(『漢字の体系』)は、従来五十音順の字引ばかりで全体を体系として解説したものがなく、漢字を体系としてとらえるのではなくては本当は鳩が豆を拾うようなことに終わります。漢字は複雑であるというが、それは純然たる体系があつてはじめて可能なもので体系性ということからいえば漢字ほど完成されたものはありません。私の字書類の中に是非あの一冊は加えておきたいと思っています。(白川) 研究所の業績として残しておきたいと思っています。(略)

家内の三回忌もすませ一くぎりついたという気持ちで、これからの予定をお知らせしておきます。(略)これから金文編(金文集)の編集にかかります。

二年前に亡くなられた奥様の三回忌の後、気持ちを整理され、改めてお仕事に対する強い意欲とともに、設立された白川研への熱い思いがうかがわれます。先生の奥様には、奥様が入院される前に数度お目にかかる機会を得られただけでしたが、飾らない、明るく楽しい方で、お宅を訪問して帰る際には、いつも見えなくなるまで手を振って見送ってくださいました。そのことがとてもうれしく、「人を見送るときは見えなくなるまで」ということは奥様に教えていただいたと思っています。この先生にこの奥様あり、先生と同じく、お会いしただけで元気づけられるような、そんな方でした。奥様が亡くなられたときに先生がしるされたという歌日記(『桂東雑記Ⅲ』所収)からは、先生の奥様への想いととも奥様のお人柄がしのべれます。さらに先生からいただいた最後の、十月三日付のお手紙。

これからはどこまでやれるか判らぬので、とりあえず甲骨文集・金文集をまとめたいと思っています。甲骨文集はあのまま復刊、金文集は新しい資料も多いので西周期は分期編年を加えたものにししたいと思います。

一日の中、朝起きて何とかできるのは三分の一です。その時間にできるだけの事を進めます。

今改めて拝見すると、身体的におつらかったであろう日々のなか、寸暇を惜しむご様子に胸がつまります。これほどまでに先生を強く執筆に駆り立て、先へ先へと向かわせたものとは、一体なんだったのでしょうか。

強烈な意志と、破壊的な論理をもち、新しい創造への行動力にみちた、ある不合理なるもの。

これは先生が「狂」について書かれた一文です（『文字遊心』平凡社ライブラリー、一三一頁）。「先生はおかしい」と思わずにはいられないほどの、旺盛な執筆力、想像を絶する忍耐力、強靱な体力、そして限りなく豊穡な学問世界——こうした先生に感じた驚異のすべてに対する答えがここにあると思います。次々と送られてくる分厚い原稿の束や膨大な著作の行間に私が垣間見たもの、それはまさに先生の「狂」にほかなりません。

先生の優しさ、愉しさ、また常に驚きを与え続けてくれる学問の魅力に出会えたことは、何ものにも代え難く、本当に有り難いことだと思っています。しかしその一方で、それらと表裏一体となって先生を形成している先生の「狂」の深さを思うとき、先生の仕事に関わっていることが恐ろしくもなります。

先生が亡くなられて一年あまりが経ってしまいました。しかしながら、著作集別巻、『漢字の体系』、『字通』の新訂版、とまだまだ刊行すべき著作がたくさん残っています。先生の「狂」の化身たるその著作を、なんとしてもきちんとした形で出さなければならぬ——それには、津崎史さん、津崎幸博さんをはじめ、今までご助力いただいた皆様のお力を、一層お借りしなければなりません。至らぬ点が多いこととは存じますが、何卒ご容赦いただき、今後ともご助力賜りますようよろしくお願い申し上げます。

そして、先生。この仕事を無事完遂できますよう、どうか最後まで見守っててください。